

環境社会史(モジュール2)・授業内容

1. 日本の環境史 1 : その原点 (学習時間 25 時間)

モジュール前半では、日本の環境史を概観する。急速な日本の産業化・近代化への歩みは、同時に地域の自然環境や生活環境を改変し大きな負荷をもたらした。ここでは、環境破壊の基本的構造を理解し、現代日本の経済発展の裏側にある環境問題の歴史を学んでいく。

環境破壊の基本構造 1 (社会的費用概念と汚染者負担の原則)

環境破壊の基本構造 2 (公共財と共有地の悲劇)

近代化・産業化と公害問題 (明治の殖産興業から戦前)

戦後復興期の環境問題

高度経済成長と 4 大公害の構造

公害経験と住民運動 (加害と被害の実相)

2. 日本の環境史 2 : 公害問題から環境問題へ (学習時間 25 時間)

ここでは高度経済成長後の環境問題に焦点を当てて議論していく。ここで学生は、日本の公害経験がもたらした政策転換、資源とリサイクル、環境問題の国際化 (地域に閉じた公害問題から環境問題へ)、物財の豊かさ重視から環境との調和重視のライフスタイルの登場といった最近の課題を理解することが求められる。

地域住民による原状回復への戦いと環境政策の始動

オイルショックと資源問題

大量消費社会と廃棄物

地球環境問題の発生 1 (NGO のインパクトと新南北問題)

地球環境問題の発生 2 (地球温暖化問題と日本の役割)

新しい環境ライフスタイルの登場

3. アメリカの環境史 : フロンティアの消滅と自然 (学習時間 25 時間)

19 世紀から 20 世紀初頭に至るアメリカの環境史は、開拓に伴う自然と人間との厳しい対立関係をその起源としている。フロンティアの消滅と共に、残された原生自然を如何に扱うかをめぐって「保護か保全か」の論争が行われ、国立公園システムの誕生につながった。学生は、環境問題の根幹が、自然環境と人間との関わりを如何に認識するかという極めて文化的な背景をもった課題であることを理解する。

原生自然の価値

環境保護と環境保全の対立

国立公園の誕生

革新主義的な保全活動

政府の自然保護政策

アメリカの環境史として採用した教科書は、重要人物の事績を時系列でまとめた構成となっており、各コンセプトの考え方を知ることができる。環境思想は多様であると同時に、それぞれが強固な価値判断を含んでいる。学生は、単に知識を習得するのではなく、それぞれの考え方について批判的に検討する姿勢を養うことが求められる。

4. アメリカの環境史：環境主義・生命・市民運動（学習時間 25 時間）

アメリカの環境保全は、1920 年代以降、次第に政府の計画された政策としてあらわれてくる。1960 年代以降は、環境汚染や化学汚染の人体への影響がクローズアップされ、コンシューマリズムの中で環境主義が市民運動化した。アメリカの環境史は、資本主義社会に通底する多くの課題を明らかにしており、文化的基盤を異にする日本人にとっても有益である。

ニューディールと環境保全（TVA と CCC）

土地倫理

生命と環境（カーソンの告発）

人口問題と環境

消費者の視点（コンシューマリズム）

地球への視座（アースデー）

5. 資本主義と環境：アメリカにみる今日的課題（学習時間 25 時間）

ここでは、アメリカの環境思想の今日的課題を理解する。

経済成長・企業活動と環境問題

ラブカナル事件・バルディーズ号事件と住民運動

急進的環境主義（ディープエコロジー・モンキーレンチング）

環境主義批判

未来世代への責任と持続可能性概念

生物多様性の保護

学生はこれまでのモジュール学習を通じて、日本の環境問題を自らの社会史として概観し、環境を如何に認識するかをめぐる考え方を、アメリカの環境思想の歴史の変遷に後付けながら学んできた。環境問題への理解方法は極めて多様である。本モジュールで学ぶ概念や歴史は、学生自らが批判的に検討することが重要であり、プログラム全体を通じて自身の環境観を形成するための基礎的知識として活用されることとなる。